

## 茶の間の隣が幼稚園

小林 美実

私は、昭和七年（一九三二年）に、東京の豊多摩郡中野町、今の中野区に生まれた。青梅街道を少しはずれると、畑や野原や小川があり、大きい農家や味噌醬油づくりの旧家が残っていた。私の家は宝仙寺が昭和元年に開設した幼稚園（感応幼稚園 現・宝仙学園幼稚園）の中にあつた。寺の住職が園長、父は主事。母は主任の様な立場だったそうだ。だから私は幼稚園に通つたのではなく、幼稚園に住んでいたのである。

狭い六畳の茶の間の引き戸をあけると、そこは幼稚園の廊下で、左側に保育室が四つならんでいた。突き当たりには遊戯室があり、父が時々長い柄の先に棕櫚しゅろの毛のついた長ばたきで、天井の煤すすや蜘蛛の巣を取っていたのを覚えてる。私の在園中に、仏教保姆養成所が併設され、突然平屋の小さい園舎が二倍位の大きな建物になったのだが、私は建設中のことを記憶していない。どちらにしても、大学を出るまで、戸をあけ

れば幼稚園の廊下の小さな家に住んでいたのだ。

今も、幼稚園（小学校・短大）は、宝仙寺の森や大きな墓地の北側の低地にある。当時は、森と墓地の間の坂道を下りて、高い檜葉の垣根の間の門を入った。この門柱は、今も残っている。幼稚園の敷地はとても広かった。門を入って右の奥には、広々とクローバーの庭がひろがり、その先は森へ、そして女学校のテニスコートや園芸実習場の花壇につながっていた。また北側には、なかなか立派なプールがあつて、後ろの築山の中腹のライオンの口から水が出るのが珍しかった。門に近い右の辺りには固定遊具があつた。大きな藤棚の下には広い砂場が二面、桐やいちぢょうの木の間には、ブランコ、すべり台、ジャングルジム、遊でん木（遊えん木かもしれない。大きな丸太の木にまたがって、前後にゆらす大きい遊具。今は見かけない）などがあつた。古い園舎は、この辺りの北側に建っていた。門の左側には竹藪や植込みがあり、その先は広

い花壇、いつも花がいっぱいに咲いていた。勿論森の中も子どもの自由な遊び場だった。園の敷地はすべて高い常緑樹の檜葉にかこまれ、その足元には野の草や花がいっぱい生えていた。クラス数は、二年保育が年長・年少二クラス、一年保育が二クラス。たった百余名の子どもの数に、何と贅沢な広さだったことか。

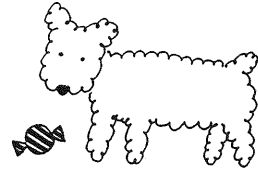
室内で私が一番好きだったのは、自由画帳に女の子の絵を描くことだった。虚弱体質だった私は、外で遊ぶ子どもが圧倒的だった中で、室内にいることが多く、時々先生に「お外で遊びましょ」と誘われた。クラスの先生は大塚先生で、背が高く、いつも優雅で綺麗でやさしかった。食の細かった私は、小さなお弁当箱にわずかなごはんの昼食ももてあまし、いつもぐずぐずしていた。一人残った私の隣に先生はずっと腰掛けて、私に話しかけたり、外で遊ぶ子どもを見たりしていた。「おはいり」の声で皆が入ってくる時になつて、やっと解放されたが、「早く食べなさい」とせか

されたり、叱られたりした記憶はない。しかし、主任の母親には毎度叱られていた。

やさしい先生も、目にあまるいたずらや喧嘩をした子どもたちには、本気で怒った。その頃の子ど

も、特に男の子には、いたずらっこ、きかん坊、やんちゃが沢山いて、ボスの子は体格もよく、強かったし、智恵があつた。私たちもそういう子どもには、良くも悪くも一目おいていた。家に帰ると、夕方おそくまで兄弟や近所の年上の子どもたちと群れて遊んでいた子どもたちは、自分たちで充分遊べたし、遊びもよく知っていた。だから先生は子どもたちと一緒に走りまわって遊ぶより、気を配ったり、見守ったりしていただくように思う。

子どもたちは元気だっただけに、スリキズ、キリキズ、コブ、トゲは日常茶飯事だった。そんな時、先生



はすぐ気がついて、赤チンをぬったり、ぬれ手拭いで冷やしたり、上手にトゲをぬいたりした。それを、私たちは先生のまわりに集まって見物し、ごっこ遊びのお医者さんや看護婦さんになって真似をしていた。

この広い、変化に富んだ庭での遊びは、よく覚えている。まず鬼ごっこやかくれんぼはよくやったが、気の小さかった私は、鬼になりたくなかった。もし子どもをつかまえられなかったら、かくれた子どもを見つけれなかつたら、と心配だった。でも結構子どもたちは考えてくれた。たとえば森の中だけのかくれんぼ、クローバーに入ったら鬼だ、かげふみ鬼は、十数えるうちに目なたに出ることなど、いろいろなルールをつくった。手つなぎ鬼もダイナミックだった。鬼が増え、何人もの鬼が横に手をつないで、ねらった子を追いつめるのは面白かった。逃げる方も必死である。それにしても「今年のぼたん」などのわらべうたから、ちゃんばら、戦争ごっこなど終わりが鬼ごっこ風の追

いかけっこになる遊びが多く、そんな時、最後は「ハアハア」息をして、皆でクローバーの中にたおれ込んだものである。すごい運動量だったと思う。

固定遊具もいかに変わった面白い乗り方をするかを競った。サーカスごっこも言った。あまり先生からとがめられたことはなかったが、じっと見ていた先生は、内心心配していたのだろう。さすがにブランコをよじのぼり横棒に手をかけると、大声で注意されていた。当時、木登りは、女の子でも上手だった。

私たち女の子の好きなのは、おままごだった。天気が良ければゴザを持って庭へ出た。季節によって、木蔭で、クローバーや芝生で、すべり台の上で、森の中で、と引越して遊んだ。ごはんの材料は、まわりからいくらでも調達できたし、子どもが毎日摘んでも、草や花や実はなくならない。お皿は落ち葉、箸は枯枝。ままごと遊びの道具はあったが、今のよう

して遊ぶ方が面白かったと思う。私の唯一得意なことは、お姫さまごっこに使う冠や首かざりなどを、クローバーの花で作ることだった。四ツ葉のクローバー探しも得意だった。皆で競っても、いつも一番だった。

庭で見つけたもので遊ぶことも盛んだった。山吹の茎の芯を抜いて吹き矢にする。桜の幹からにじみ出るヤニを糸のようにのばして、鼻の頭や指につけてはしゃいだ。プラタナスの幹の皮をはぎ、小さくして、土の上の陣取りゲームで使った。今とちがって、地面にいくらでも石や木の先で線や絵が描けたが、それは遊びを面白くした。石けりやジャンケンドンやいろいろな陣取り遊びは、子ども自身で毎日新しい遊びにすることができた。

庭の横にたおした土管やジャンゲルジムも陣地や基地になったが、何といっても一番スリルがあったのは、森の中の洞穴だった。小さい穴だったが、年少組の子どもにとっては恐ろしかった。そこを出入りして

元氣にとびまわる年長組の子どもたちにびっくりした。穴に慣れると、ここを使って、お化けごっこ、戦争ごっこ、山賊ごっこをして、女の子も看護婦さん、お母さん、お化け役で遊んだ。

森や庭には、沢山の生き物がいた。稀に森の中で雉子やイタチらしい動物も見た。蛇はいつものことで、さほど誰も驚かなかった。ギンヤンマや大きいアゲハチョウには歓声を上げたが、何といつても森の中でタマムシを見つけた子どもは、ヒーローになった。しかし生きたタマムシを見つけたことは無い。それでも、緑色で金色や七色に変わって光る虫に皆憧れた。その頃の子どもの本には図鑑がなかったの、先生に見せて話を聞いたが、先生がどんな話をしたかは覚えていない。子どもたちが帰り静かに日が暮れてくると、コモリが飛びまわり、フクロウが鳴き出した。

この豊かな自然の中で元気に遊ぶ子どもたちのために、先生たちは、毎日子どもが帰った後、庭や保育室

を清掃し手入れをしていた。窓や戸の棧、敷居、床板の木の間まで丁寧にきれいにし、よく新聞紙をぬらしてまき、それをはき集めていた。このようなことは、当時はどの家庭でもしていたのだろうが、おかげで古くさい園舎も中はピカピカにみがかれていた。どんなに泥まみれで遊んだ子どもでも、室内では気持ちよく、ねころんだり、はったりしてすごしてほしい、と願っていたのだろう。園庭の遊具も、今より点検が常に必要だったと思う。ブランコをつるすのは縄だったから、切れると大怪我にもなる。すべり台や木の遊具は、ささくれがないか調べる。

室内も砂場も、今のように物であふれていなかった。保育用品や遊び道具も手作りが多かったのではない。バケツに新聞紙で手作りしたねんどがいつも物置にあった。子どもたちもこれでねんど遊びをしたが、先生たちはこのねんどで人形の頭かぶを作り服を縫い、人形劇を作って子どもたちに見せてくれた。人形

劇は子どもたちの大きな楽しみだった。

園長は宝仙寺の住職だったが、同時に女学校の校長であり、仏教の宗派の重要な役職も担っていたので、園の運営は主事である私の父にまかされていた。園長・富田敦純氏は私の父と従兄の関係であったが、親子ほど年が違っていたので、長い間、私は園長を本当の祖父と思っていた。この寺のもつ自然に恵まれた広大な場所を子どもたちに提供し、自然のもつ教育力で子どもたちを育てよう、と考えたのは、この園長だった。寺院の鐘の音が響く自然の中で、自由に走りまわる子どもたちを、自身が信州の山寺で育った時の姿と重ねあわせて見ていたのではないかと感じる。

園長は、時々森の中の坂道を下りて、クローバーの庭に現れた。その姿を子どもたちは見つけると、「園長先生」「山羊園長だ」と言ってかけよった。あごに山羊さんそっくりの髭をはやし、眼鏡の中の目が、これまた山羊さんのように細くいつもやさしかった。市

電の事故で右足を失い、松葉杖をつく園長は、歩く時少し痛むのか、「フン フン」と言っていたので、「フンフンじいさん」と真似する子どももいた。そんな時は「アハハハハ……」と豪快に笑うのだった。本当に子どもも好きな園長だった。

戦時中、園庭は、芋畑と南瓜畑になった。戦後間もなくして、養成校は短大になり、小学校が設立され、庭は狭くなった。急増した子どもたちにふまれて、クローバーはたちまち消滅。森は荒れはじめたため、金網がはりめぐらされて出入りができなくなった。それでも、今、森の緑が豊かになったのを見て、ほんの少し嬉しいと思っている。子どもの仏様であるお地藏様が、昔と変わらず園庭の木蔭に立っておられる。

北欧やドイツにある森の幼稚園の写真や記事を見る時、私は、子どもの頃、自分が住み、育った幼稚園を思い出している。

(宝仙学園短期大学名誉教授)